

2018年（平成30年）

4月例会

日時：4月21日（土）14時より

会場：東京工業大学大岡山キャンパス **西8号館W833教室**

①講師：日本学術振興会特別研究員 茂木謙之介

題目：戦前期地域社会における皇族の表象
—福島県会津地方を事例に—

司会：東京大学 前島志保

②講師：専修大学 山口政幸

題目：村上春樹と翻訳

司会：敬愛大学 芳賀理彦

5月例会

日時：5月19日（土）14時より

会場：東京工業大学大岡山キャンパス **西8号館W833教室**

特別講演「近代的『自然』概念とその定着をめぐる」

講師：国際日本文化研究センター（名誉教授）鈴木貞美

司会：日本大学 井上健

7月例会

日時：7月21日（土）14時より

会場：清泉女子大学 2号館225教室

特別企画「カズオ・イングロの文体」

講師：学習院大学 眞野泰

司会・聞き手：上智大学 新井潤美

9月例会

日時：9月15日（土）14時より

会場：清泉女子大学 2号館225教室

①講師：日本大学（非常勤）雨宮久美

題目：詩と絵画の交響

—『龍虎』を中心としてみた観世信光の能世界—

司会：早稲田大学演劇博物館（招聘研究員）高山茂

②講師：日本大学 椎名正博

題目：堀口九萬一によるレミ・ド・グールモン作品の漢詩訳について

司会：法政大学 衣笠正晃

INSIDE THIS ISSUE

1. 4月・5月・7月・9月例会案内
- 2-3. 例会会場案内
- 4-6. 例会要旨等
7. 『研究報告』論文投稿規程等
8. 東京支部短信

幹事会開催のお知らせ

第1回幹事会：

2018年7月例会後、例会会場にて開催します。

（幹事会構成員は、幹事、支部長、事務局長、各種委員会委員長、会計、会計監査です）

役員連絡会開催のお知らせ

2018年4月、5月、および9月例会終了後、7月は午後1時より、例会会場にて開催します。

（役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、会計を含む事務局委員、各種委員会委員長です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します）

【訂正】

印刷配布版では、4・5月例会の会場の記述に誤りがありました。

【誤】 会場：東京工業大学 大岡山キャンパス 西9号館 W934教室

【正】 会場：東京工業大学 大岡山キャンパス **西8号館 W833教室**
お詫びして訂正いたします。

4・5月例会会場

東京工業大学大岡山キャンパス
西8号館 W833教室

〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1

◆ 大岡山駅
徒歩1分

会場：㊤西8号館



大岡山駅

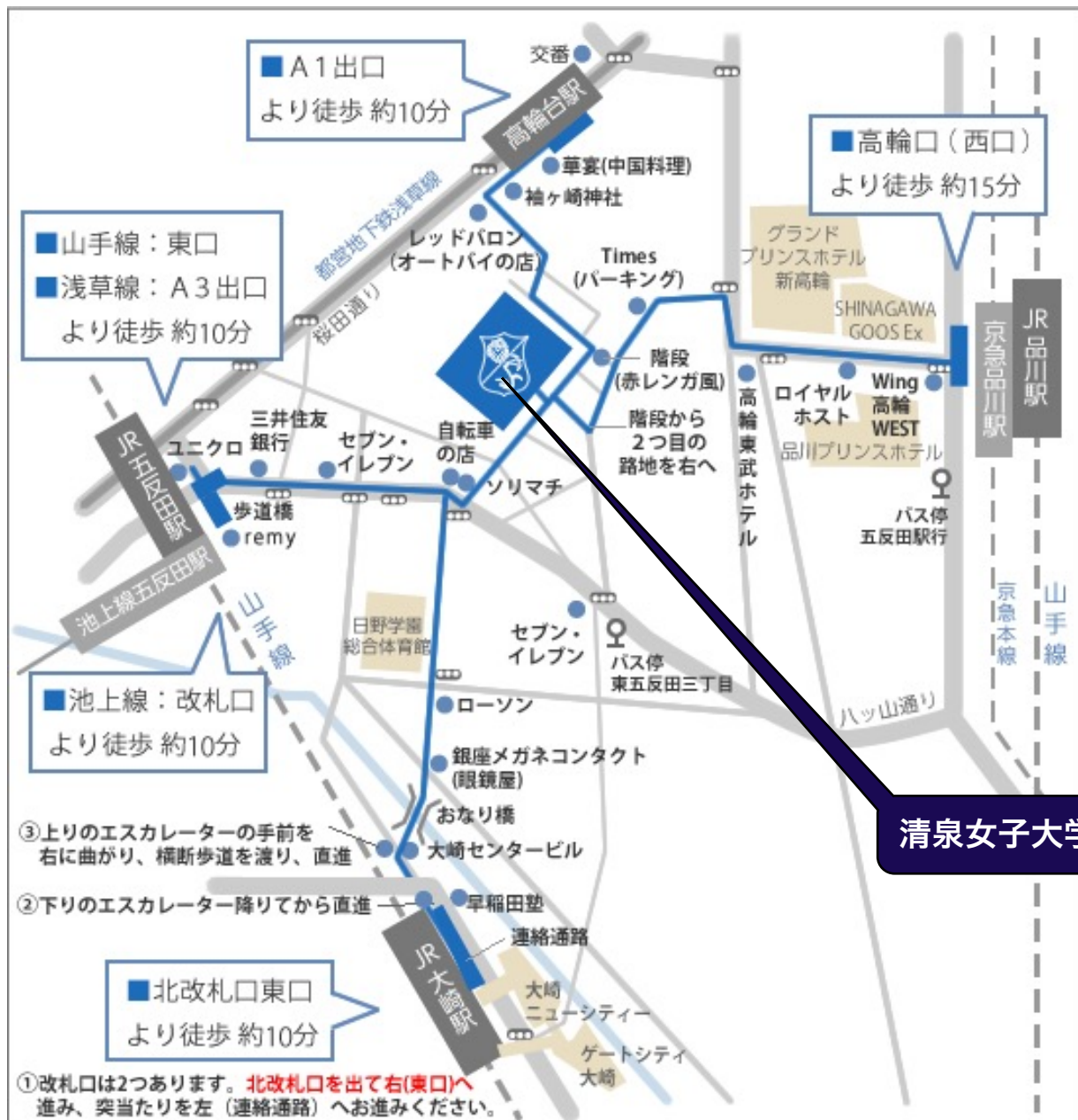
【訂正】

印刷配布版では、4・5月例会の会場の記述に誤りがありました。

【誤】 会場：東京工業大学 大岡山キャンパス 西9号館 W934教室

【正】 会場：東京工業大学 大岡山キャンパス **西8号館 W833教室**

お詫びして訂正いたします。



7・9月例会会場

清泉女子大学
2号館 225教室

〒141-8642

東京都品川区東五反田3-16-21

◆ 五反田・大崎・高輪台駅
徒歩10分

◆ 品川駅

《五反田行》バス「東五反田3丁目」
徒歩5分

4 月 例 会 発 表 要 旨

戦前期地域社会における皇族の表象

—福島県会津地方を事例に—

日本学術振興会特別研究員 茂木謙之介

近代天皇(制)をめぐる表象研究は近年その成果を厚くしている状況にあるが、そのなかでも十分検討のなされてきていないものとして、皇族の表象および地域社会という言説展開の場とを挙げることができる。

本発表では、1928(昭和3)年の秩父宮雍仁親王と松平節子(勢津子)の成婚をめぐる、主に福島県会津地方におけるメディア報道および公文書を分析し、そこに出来る諸表象を読み解く。地域と関わりを持った人物が皇室内の存在となるに際し、現地ではどのような表象が展開されていたのか、地域社会における言説に内在する論理に注目しつつ考察し、翻っては昭和初年代における地域社会と天皇(制)という問題系にアプローチする。

分析に際しては地方紙として『会津日報』『新会津』を中心的に扱い、『福島民報』を補助線として傍証的に検討を行う。また公文書としては、会津若松市役所所蔵文書を使用し、同時代の行政機関における反応を確認する。

本研究によって地域社会の内部における「朝敵」という自己認識と、そこからの名誉回復の言説構造を究明するとともに、その表象としての松平節子/秩父宮勢津子が在ったことを明らかにする。その際には明治維新期の歴史的な脈が呼び出され同時代言説との接続が図られる状況と共に、地域社会を国民国家の一部として再認識していく過程も同時に明らかとなってくるだろう。

また、節子/勢津子表象が展開する際には、そもそも地域との関わりが希薄なことに起因する具体性の欠如を埋めるため同時代の皇族イメージが参照されると共に、その訪問の受け入れに当たっては行幸啓や「御成」イメージとの共通性と差異が確認される。ここからは平民から皇族妃へと変化していく境界的な存在としての節子/勢津子を如何に表象するかという、同時代のメディア的な葛藤を読むことができると考える。

以上の検討を通して同時代地域社会にとっての皇族・皇室とは何であったのかを明らかにしたい。

村上春樹と翻訳

専修大学 山口政幸

2017年3月に、中央公論新社から出された『村上春樹翻訳(ほとんど)全仕事』は、この作家がデビュー以来宮々と積み重ねていった翻訳のほぼ全貌の姿をよく表している。それは35年で、70冊に及ぶという相当の分量のものだ。村上という作家は、自身の書くものを自己の厳しい管理下に置くことを、誰にもまして実践している作家だが、この翻訳という仕事に関しても、やはり解説を施していくのは自分自身であって、他人任せにすることはない。言葉を換えれば、彼の3年おきくらいの周期で出される小説とそれに付随するエッセイや対談と同じように、そこには、彼以外の言説は差し挟まれる余地はほぼなく、村上が折々に開示する言説のみが、ちょうど、暗い海で時おり放たれる灯台の灯のように、読みの方向性を定める基準値と化していく。が、翻訳の場合には、そこにもう一人の established な存在として、柴田元幸という稀代の翻訳家が付いて回るのが不可避と言える。この『全仕事』にも彼との対談が織り込まれており、独自の精彩を放っている。またこれと同時期になされた新潮文庫で、10冊に及ぶ村上柴田翻訳堂は、彼らの英米小説に対する考え、および翻訳や既訳との関係を考えるうえで、絶好の資料となるものでもある。今回ここから、村上の訳したジョン・ニコルズの『卵を産めない郭公』を中心に取り上げて、その翻訳の姿勢について論じていく予定である。

5月例会発表要旨

《特別講演》

近代的「自然」概念とその定着をめぐって

国際日本文化研究センター（名誉教授） 鈴木貞美

①柳父章『翻訳の思想—「自然」とNATURE』（1977）の功罪と鍵概念の翻訳問題にアプローチする方法を問い直す。②文部省用語は昭和戦前期まで「天然」（天地自然、天地のあるがまま）だったことなどを考慮し、20世紀への転換期に近代的な「自然」の語が定着した理由を再考する。③20世紀前半の英語圏で有機体的宇宙進化論が流行したこと、また、地球環境問題に直面し、1970年代から「日本科学史」が変貌してきたことなどに関連させ、「近代的『自然』概念」とは何だったのかを、改めて問題提起する。④報告時間の余裕に応じて、「日本人は自然を愛する民族」説の由来について、比較文化史の観点から、藤岡作太郎『国文学史講話』（1907）、和辻哲郎『日本古代文化』（1920, 25, 39）、土居光知『文学序説』（1922, 27）とそれぞれの理論的・歴史的背景および影響について述べてみたい。

7月例会発表要旨

《特別企画》

カズオ・イシグロの文体

講師 学習院大学 眞野泰

司会・聞き手 上智大学 新井潤美

カズオ・イシグロの初期の作品は、その題材も文体も、あえて「日本的」であった。イギリスの文学賞ブッカー賞を受賞した『日の名残り』（1989年）では作品の舞台はイギリスだったが、その当時は「外国人の作家があえてイギリスを舞台に選んだがいささか不自然な描写だ」といった批判もあった。つまり、イギリス人が期待するような写実的な描写や、登場人物の会話がそこには描かれていないのである。イシグロの作品の大部分は一人称の語りで書かれているが、その文体は、イギリスの一人称の小説の語りにあるような、その語り方によって、語り手の社会的地位や階級を読者に伝えるものではない。例えば2000年の『私たちが孤児だった頃』については、「語り手の設定されている階級とその口調がまったく合っていない」と酷評された。写実主義的な小説に慣れているイギリスの読者にとって、イシグロの文体は不自然なものに思われるのである。イシグロはなぜこのような文体を使って書くことを選ぶのか。その効果と受容はどのようなものなのか。イシグロの文体について、グレアム・スウィフト、イアン・マキューアン、ジュリアン・バーンズなど、現代イギリス作家の翻訳を手がけてきた眞野泰氏に話を聞く。

9月例会発表要旨

詩と絵画の交響

—『龍虎』を中心としてみた観世信光の能世界—

日本大学非常勤講師 雨宮久美

観世小次郎信光（1450～1516年）は、音阿弥の第七子である。太鼓役者観世弥三郎に師事し太鼓を生業とし、権守に任じられるほど太鼓の名手であり、諸芸に明るかった。

室町幕府が弱体化し寺社も衰微して観客層が変わる中で、世阿弥の象徴主義風の高尚な能を打開したのが、視覚的效果を重視し、大がかりな見せ場で観客を魅了する信光の作能である。『能本作者註文』（奥書によれば大永四（1524）年成立）に信光の作品は、三十一曲確認することができる。その中に「龍の能」は、『大蛇』『玉井』『久世戸』『愛宕空也』『太施太子』『張良』『巴園』『龍虎』の八曲がある。前半の四曲は、日本の伝承を題材とし、後半の四曲は、中国故事と中世日本での受容を題材とする作品である。

「虎相啖食 龍虎」（李白「古風一」）のような龍と虎とを対峙させる漢詩の修辞は、禅家でも好まれ、例えば近世以来愛読されている禅語集『禅林句集』にも「風従虎雲従龍」のような句が見られる。『龍虎』は、その詞章中に、「四睡の一つ」として虎は画題になるとあり、また牧谿「龍虎図」などの絵画の世界を彷彿させる作品でもある。

本発表では、『龍虎』を中心に禅語や漢詩の措辞をもとにどのように作品世界が作られているのか、その絵画的な情景描写の題材源とともに考察したい。

堀口九萬一によるレミ・ド・グールモン作品の漢詩訳について

日本大学 椎名正博

『月下の一群』などのフランス詩の翻訳で知られる詩人堀口大學（1892～1981）の父、堀口九萬一（1865～1945）は日本最初期の外交官として、そのキャリアのほとんどを在外公館勤務に過ごした。その間、いわば「アマチュア」として文学、とりわけフランス文学に親しみ、その著書『遊心録』（1930年）には、ゾラ、フランソワ・コッペ、アナトール・フランス、メーテルランクなどフランス語文学の作家たちの名が多数登場する。またこの随筆集には九萬一自身の文学的な仕事として、象徴派の詩人レミ・ド・グールモンの詩2編の翻訳が収められているのだが、この翻訳は日本語ではなく、漢詩の形への翻訳となっている。九萬一の死後、息大學が亡父の漢詩作品のなかから99篇を選んで私家版として『長城詩抄』（1975年）を刊行したが、この中にはやはり、グールモンの詩の漢詩訳と九萬一の漱石漢詩論が掲載されている。堀口九萬一に関する文学的な研究はこれまでほとんど発表されておらず、柏倉康夫による評伝『破れし國の秋のはて 評伝堀口九萬一』（2008年）がほぼ唯一の著作といってよい。柏倉の著書においても、フランス詩の漢詩訳に触れて「優れた翻訳だ」としてはいるが、翻訳としてどのような問題があり、どのような点で優れているのかには全く言及がない。本発表では、九萬一自身が漱石の漢詩を評した文章を手がかりとしながら、漢詩への翻訳という作業において、九萬一がどのような工夫をし、漢詩という日本文学の伝統をどう評価していたのか、またそうした九萬一の文学観、文学史観を息子大學がどのように受け継いでいったのか、についても考察を広げていきたい。

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文投稿規程

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』（以下、「電子版『研究報告』」）は、原則として毎年一回、11月末日に発行される。電子版『研究報告』への研究論文の投稿は、以下に定める手続きによるものとする。

1. 投稿資格

研究論文の投稿資格を有する者は、本学会員で、前年および前々年に開催された東京支部例会または東京支部大会において研究発表や講演等を行なった者とする。投稿者は、支部例会または支部大会における各自の発表をもとに、投稿論文の原稿を作成すること。

2. 論文の字数（語数）および書式

投稿論文の字数（語数）および書式等については、別に定める「電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文執筆要領」に従うこと。

3. 論文の提出

投稿論文の電子媒体のファイルを、8月16日から8月31日までに、以下の送付先に送付すること。

送付先：日本比較文学会東京支部編集委員会委員長 西村靖敬

yasunori-nishimura@jcom.home.ne.jp

※メールアドレスが変わりましたので、ご注意ください。

4. 採否の決定

投稿論文の採否は、東京支部編集委員会および企画委員会が査読の上、決定する。なお、必要と認められる場合には、上記両委員会の委員でない支部会員に査読を委嘱することがある。

5. 著作権等

投稿者は、電子版『研究報告』に掲載された研究論文の著作権を有するが、掲載が決定された時点で、日本比較文学会東京支部がワールドワイドウェブによって公衆送信することを許諾したものとする。

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文執筆要領

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への研究論文の投稿にあたっては、以下の執筆要領に従って原稿を作成すること。

1. 使用言語

使用言語は日本語、英語またはフランス語とする。

2. 字数（語数）

原稿は横書きとし、注等を含めて、日本語の場合は8,000～12,000字とする。英語およびフランス語の場合は3,500～5,000語とする。

3. 書式

東京支部のホームページより、投稿用のテンプレート（ひな形）をダウンロードして使用し、テンプレートに記載された書式に関する留意事項を踏まえて、原稿を作成すること。

4. 図版の使用

写真、図、画など図版を挿入することもできるが、図版が占めるスペースも、規定の字数のうちに含まれるものとする。また、図版の掲載に関する著作権等の問題の解決は、すべて投稿者の責任において行なうこととし、十分に著作権法を尊重するよう注意すること。

出版の役割

東京支部長 ソーントン不破直子

この冬は例年にない極寒でしたが、皆さまお元気で新年度を迎えられるようお祈り申し上げます。

今回の配布物には、例外的に春風社のPR紙『春風新聞』21号を加えました。昨年7月の支部特別企画《学術論文・学術書の出版に向けて》は、学術論文出版に関しては千葉大学教授西村靖敬氏に、学術書出版に関しては春風社代表三浦衛氏に講演していただき、出席者も多く、たいへん好評でした。同封した『春風新聞』は、三浦氏の講演を、時間的には半分ぐらいに縮めた、しかし要を得た報告を掲載しております。出版用原稿の作り方、出版社へのアプローチの仕方、出版費用の工面法、編集者の位置など、会員の皆さんの中には知らなかったこと、知りたくてもどこに訊けばいいのか分からなかったことなども提供されているかもしれないと思い、講演会に出席されなかった支部会員にも届くようにと送らせていただきます。

自分の研究成果を出版することは、自分の頭の中にだけ生きてきた研究が社会で新たな命をつなぎ、最後の面倒をみてやるようなものです。研究者としての地位を確保するだけでも大変な昨今の情勢ではありますが、本という人類の発明を継承していくことは私たちの仕事の一部であるように思います。

ちなみに、今年度は6月に全国大会が日本大学文理学部で開催されるため、東京支部会員が実務のお手伝いをしますが、10月には例年通り東京支部大会が明治大学駿河台キャンパスで開催されます。両会とも皆さまのご参加をお待ちしております。

第56回東京支部大会研究発表者募集

平成30年10月21日（日）、明治大学駿河台キャンパスにおいて、第56回東京支部大会が開催されます。研究発表を希望される方は、氏名、住所・連絡先（電子メールアドレス）、所属、及び、発表題目、400～600字程度の発表要旨をメール添付で、6月9日（土）必着で事務局（shiina@chs.nihon-u.ac.jp）までお知らせください（郵送も可）。発表時間は25分、質疑応答が10分です。なお、申込み受付の返信をお送りしますので、ご確認ください。

月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局（shiina@chs.nihon-u.ac.jp）に氏名、所属、題目、連絡先（メールアドレス、電話）を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送でお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分（質疑応答を除く）です。

日本比較文学会東京支部ニューズレター 123号

発行人：ソーントン不破直子

編集委員会（編集担当）

委員長：西村靖敬

委員：佐々木悠介 高柳聡子 永井久美子 堀江秀史

事務局（発送担当）

事務局長：椎名正博

事務局委員：鈴木美穂 土田久美子 芳賀理彦 畑中健二

福島君子 蒔田裕美 茂木謙之介 森本真一

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部 総合文化研究室

椎名正博研究室

TEL/FAX: 03-5317-9715 / 03-5317-9424

E-mail: shiina@chs.nihon-u.ac.jp